

提 言

心が通い合う関係づくりで 幸せの土台はぐっと高くなる



堀田 力 前さわやか福祉財団会長

ほった・つとむ／1934年京都府生まれ。1958年京都大学法学部卒業後、検事任官。1976年東京地検特捜部検事としてロッキード事件を担当する。1989年最高検察庁検事、1990年法務大臣官房長を歴任。翌年退官後は福祉活動に力を入れ、同年さわやか福祉推進センター（現さわやか福祉財団）を設立し、財団理事長・会長を歴任。『「共助」のちから』（実務教育出版）など著書多数。

検事の世界から一転して、人が互いに助け合って共生する社会をめざして30年以上にわたって福祉の道を歩んできた堀田さん。病に倒れた体験をとおして、ぬくもりやふれあいのある環境のなかでだれもが幸せに生きる社会の重要性を、身をもって感じています。

■「人間とはこんなに弱いものか」と痛感

2022年12月になんの前触れもなく突然、家で倒れました。病院に行くと脳梗塞と診断され、そのまま入院。初めは十分に言葉が理解できず話すこともできない、場所も地理もわからない。また、妻の助けを借りなければ、食事もできない、水も飲めない、トイレにも行けないという、まるで親の世話がないと生きていけない赤ん坊のような状態で、消えてしまいたいような心境でした。まさか、そんな状態になるとは夢にも思っていなかったもので、とてつもないショックを受けました。また、これからどう生きていけばよいのか、さびしさや心細さを骨の髄まで感じて、人間というのはこんなに弱いものかと思いました。

それまでわたしは30年以上にわたって、さわやか福祉財団理事長、後に会長として、人と人が助け合う新しいふれあい社会を提唱してきました。自分が実践してきた運動ではあるものの、助け合いというのはただ「善意で助け合えばいい」という程度のものではないことを、痛感しました。他者の自然な助けがなければ生きていけない、なのに、どのように助けを求めてよいかわからない。そうした心許ない状況に置かれる人がたくさんいて、さらに増えていくのではないかと。これから先、いったいどうなるのかと暗たんたる気持ちになりました。

さいわいケアマネージャーの人などに相談にのってもらって、さまざまな方面で手助けしてもらう方法やアイデアをいただいて、少しずつ自分の気持ちも落ち着くようになりました。週に2、3回、デイサービスを利用していると、わたしと似たような状態の人や、機能回復に向けてがんばっている人もいて、そんな人と接するうちに3か月ぐらいでショックから抜け出せました。

■人は励まし合って生きていることを確信

倒れた体験をとおして痛感したのは、「自分のことは自分でやる」「生活するために自分で稼ぐ」「一人で生きていこう」などと考えていると、とてつもない心細さから抜け出すことはできないということ。もちろん自分でがんばろうという気持ちは大切ではあるけれども、いろいろな人に声をかけて助けてもらい、困っているときには助けてと言え、困ってる人を見たらみんなで助けるという、そういう社会にしないと人間の深い孤独、心細さを克服できないと思います。

そこで、まず自分から行動していこうという思いから、近所を散歩しながら会う人、会う人に声をかける「あいさつ運動」をするようにしました。夕方、少し派手な運動帽子をかぶり息子に付き添ってもらって、歩行器や車いすで近所を1～2時間回ります。すれ違うすべての人、子どもからお年寄りまで、知らない人にも「こんにちは」「お元気ですか」とひと言、声をかけるのです。わたしは耳が遠いため十分な話はできなくても、あいさつはできますから。

子どもたちは、かわいい声で「こんにちは」とあいさつを返してくれる。犬を連れて散歩している夫婦や中高年の女性の顔見知りも増えて、犬も懐いて寄ってきてくれます。ただ、短い言葉を交わすだけですが、思っていた以上にうれしくて励みにもなるんです。人はふれあいの心をけっして失ってはいない、人と人は心を通わせて励まし合って生きている、そのことを確信しました。



あいさつ運動はリハビリも兼ねている。人とのつながり、助け合いの重要性を身にしみて感じたと話す

■ J Aの助け合いの精神をみんなのものに

近所で始めた「あいさつ運動」は、ちょっとした気持ちがあればだれでもできることです。自分の殻に閉じこもらず外に心を開いて、そして自分を生かす活動や人に役立つ生き方を見つけていく。これからも小さな運動をしながら、すべての人が助け合って自分の人生をそれぞれ作り出していけるような社会をめざして、地域の助け合いの活動や交流の輪を広げていきたいと考えています。

J Aは、組合員同士が協力し合って、よりよい生産や販売などを行っている組織です。競争して得られる経済的な利益よりももっと大きな幸福が、J A組織が展開する助け合いにはあると思います。

わたしはこのたびの病気で「あいさつ運動」を始め、助け合いの重要性を実感しました。自分のささやかな力が人の役に立つということがわかれば、生きていく自信にもなるし、幸せにもつながります。助け合いの精神がみんなのものになれば、幸せの土台はぐっと高く、大きくなるでしょう。J Aが志している、みんなが助け合って、みんなが幸せになるという理念がもっともっと世の中に広がっていくことを、心から願っています。